

50年先に思いを馳せる

先月8月30日、二宮神社で「御木曳き（おきひき）」と「立柱祭」いう行事がありました。神社の設立120周年を記念して、周囲の道路整備の兼ね合いもあり、場所を少し動かし、老朽化した既設の鉄製の鳥居を新たに木製に換えることになりました。せっかくならば、地元産の木でと、久野の山（辻村百樹さん所有）から樹齢300年の杉の大木を分けていただいたそうです。その木を地元の林業組合の若手が製材し、これまた地元の棟梁たちが鳥居に仕上げるといふ地元の人たちによる取り組みです。地元になんすごい木があるくらい豊かなこの小田原の自然を、そして、地元になんか熱と素晴らしい技術を持った若い人がいることを、より多くの市内外の人に知ってもらいたいという思いからの取り組みだそうです。

当日はかんかん照りの中、老若男女約500名が集まり、御木を藤棚から馬出門へ引き、そこでセレモニーをした後、また、皆で引いて、神社まで運びました。その後は棟梁たちの技の見せどころ。一寸の狂いもなく木どうしが支え合い、見事に大鳥居が立ち上がりました。

二宮神社の草山宮司はご挨拶の中でおっしゃっていました。地元の材を地元の力と技で活かすことで、多くの人に、特に小田原の人たちにわがまちの魅力を知ってもらいたいと。そして、私が一番感銘を受けたのは、この事業を50年おきにやっていくという決心したというくだりです。ご存知のように、伊勢神宮では、20年おきにお社を建て替えて神さまが引っ越しをなさる遷宮という大事業を1300年に亘って（室町時代に一時中断したこともあったそうですが）繰り返しています。これを見習って、二宮神社では50年おきに大鳥居の建て替えをするというのです。この大木を曳いた人のうち、50年後にこの世にいる人はどのくらいいるのでしょうか？（私は確実にいないと思いますが…）

AI（人工頭脳）とかIOT（インターネットオブシングス）とかますますスピードアップする現代の暮らしの中で、50年先のこと、それも自分がすでにいなくなった世の中のことに思いを馳せ、50年後の人たちのことの幸せを願い、そのために今自分ができるといふことを実行するといふのは、今の時代にはなかなかできないことだと思います。私も含め、会員の皆さまも、商売の現場で一喜一憂、四苦八苦の日々かもしれません。もちろん、決してその現実から逃げるわけにはいきません。でも、しかし、同時に、自分の人生を超えた時空の中に今の自分を置いてみる、その時間軸の中で今の仕事を考えてみるという一瞬もあっていいのではないかと、汗だくで御木を曳きながら思ったしだいです。

会頭 鈴木悌介